

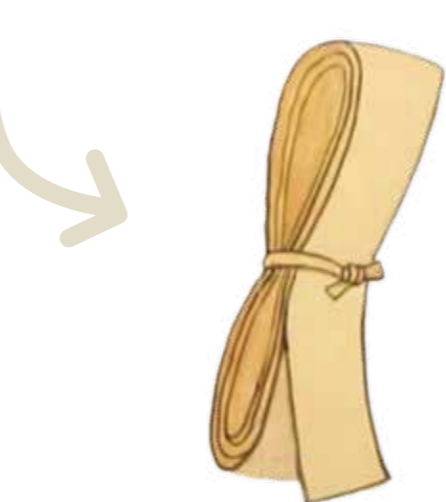
しな織ができるまで

しな布とは、「シナノキ」「オオボダイジュ」の樹皮から採れる繊維で糸を作り、布状に織り上げたもので、約1年間を掛けて、22の工程を経て作り上げられます。ざっくりとした手触りと落ち着きのある風合いが特徴です。古くから、山形県鶴岡市関川に住む地域住民の生業として育まれてきました。



1 皮はぎ (6月中旬～下旬、1日間)

シナノキを切り倒し、枝を落とします。樹皮を剥いで、つぎに表皮を剥ぎます。



2 乾燥 (7月中旬、7日間)

日光で充分に乾燥させ、「しな煮」まで屋根裏部屋などにしまっておきます。



8 しな漬け (9月上旬・2日間)

カセにした「しな」を大きな桶にいれ、こぬかと水で2昼夜漬け込み、川できれいに水洗いします。

9 洗う 川できれいに洗う。



7 しなこき (8月下旬)

川に持って行き、流れの方向に何回となく、こいていきます。右手に石を持つ人や、竹棒を持つ人がいます。こくことにより、繊維だけが残り、幅広い一枚ものでやわらかいものになります。



12 しなうみ

しな糸をつないでいくのに、糸のつなぎ目に爪で穴をあけ、小さい輪を作り、次のしな糸をさし入れ、よりこんで長い糸にかえていきます。

3 水つけ

「しな煮」の2日ぐらい前に、家の前の池の水につけておきます。



4 巻く

水に浸しておいた皮を取り出し、釜に入れる大きさにぐるぐるまいて十文字にゆわえます。



5 しな煮 (8月上旬・4日間)

赤土で作ったかまどに大釜をのせ、巻いた皮と、木灰、ソーダ、水を入れて約10時間～12時間煮ます。



6 へぐれたて (8月中旬・2日間)

釜から出してサッと水洗いし、両手でもみほぐし、1枚1枚層ごとにはがしていきます。

10 しなほし (9月中旬・2日間)

「しなさき」まで保存しておくために、軒先などにつるして完全に乾燥させます。



11 しなさき (11月上旬・10日間)

「しな」を水でサッとぬらして、指をたくみに操って、幅広いしなを細かく裂き、糸のようにします。裂き終わると、一束ずつに束ねて、また乾燥させておきます。



22 織る (はたおり) (3月中旬～下旬・10日間)

昔から織られている「いざり機」や、改良された「高はた」で織られています。こうして「しな布」が出来ます。

13 へそかき (11月中旬)

「しなより」を容易にするために、うみ終わったしな糸は「おほけ」にたまったものをそのままひっくり返し、「へそかき」をします。中に親指を入れながら、巻いていきます。



14 しなより (11月末～12月初旬・3日間)

乾燥すると、ささくれるので、「へそ」を充分にぬらして「糸より」をします。



15 枠移し (12月中旬)

「うったて」という台に木枠を乗せ、手回しで「つむだま」から糸をうつつしていく。

16 整経 (12月下旬・1日間)

「へば」(整経台)に糸を引っ掛けて行くのに、歩く回数を少なくするため木枠を10個以上常備し、穴のあいた板に糸を通し、上下往復して一つ幾分の縦糸をかけていきます。

17 ちきり巻き

間に「はたくさ」をはさみながら、はた織り機の心棒「ちきり」に巻いていきます。

18 綜光通し

(そうこうとうし) (2月中旬・2日間)

19 おさ通し 20 おりつけ布に結ぶ

21 くだ巻き

横糸を「くだ」に巻き、「ひ」に通します。